

創建の時期についても曖昧である。「封内風土記」巻之4（田辺希文）には『伝云淳和帝  
 天長五年〔828〕。慈覚大師之創建。而号青龍山延福寺』とある。これは「松島天台記」  
 〔弘長3〔1263〕成立、「仙台叢書」第2巻の内〕の『天長戊申五年慈覚大師建立也』  
 に拠ったもので、「奥羽観蹟聞老志」（佐久間洞巖）・「松島町誌」第2版等にもこれを採  
 っている。これに対し「宮城県仏教史」（佐々久）等は『慈覚の勧請開山で……元慶3年  
 〔879〕の開基と伝えられる。』とあるが、慈覚大師はこれより15年前の貞観6年〔864〕  
 に既に入寂しているので疑義がある。慈覚大師の法孫が関東・東北に多かったので、慈覚  
 大師を勧請開山としたものが多い。山寺の立石寺・松島延福寺・霊山・北上黒石寺・中尊  
 寺等がその例である。

- 注(13) 京都市東山区本町にある臨済宗東福寺派の大本山。嘉禎2年〔1236〕藤原道家が創建、  
 弁円を開山とした。京都五山の一。鎌倉・室町時代の古建築で有名。
- 注(14) 姓は藤原、はじめ伊沢氏を称した。源頼朝の平泉征伐後、文治6年〔1190〕奥州留守職と  
 して多賀国府に着任した伊沢左近将監家景の後裔である。のちに、留守氏は天正18年小田  
 原に参陣しなかったため領地を没収され、政宗の家臣となり、一門に列した。
- 注(15) 鎌倉幕府の執権北条時頼は、出家して道崇、最明寺入道といい、密かに諸国を遍歴して、  
 治政・民情を視察したと伝えられる。「鉢の木」の伝説など有名である。

資料 宮城県仏教史（佐々久、単行書及び「宮城県史」第12巻の内）  
 松島巡覧記（相原友直、「仙台叢書」第2巻の内）  
 松島天台記（「仙台叢書」第2巻の内）  
 松島拾翠  
 元亨釈書（虎関師錬、「国史大系」第31巻の内）

## 6. 江戸時代の郷土的な俳書

問 貴館所蔵の江戸時代の郷土俳人の俳書（書名、著者名）をお知らせください。

- 答 松窓乙二 乙二七部集 上・下 天保8〔1837〕序 江戸萬笈堂刊  
 (1) " " をのゝえ草稿（題簽書名：松窓句集） 文政6〔1823〕序  
 " " 乙二自筆句帳 昭和42 白石公民館刊〔原本：文化12〔1829〕刊〕  
 乙二句集（「仙台叢書」2 大正12）
- 大場雄淵 伊具の巻 かくし田の里 上 文化頃〔1801～1818〕刊  
 (2)

大淀三千風 松島眺望集（「仙台叢書」1 大正11〔原本：天和2〔1682〕刊〕

(3) 遠藤日人〔あつじん〕 日人句集（「仙台叢書」4 大正12）

(4) 麦羅 麦羅念仏（「仙台叢書」2 大正12）

(5) 注(1) しょうそうおつに。俳人。本姓岩間、名は清雄、俳号を松窓乙二という。白石千手院の修験で権大僧都。独学で和漢の書を読み、人となり静寂、冥想的で、俳諧に一生面を開き、若い頃蕪村が「後世の俳諧この人〔乙二〕より起る」と嘆賞したが、その風格ある作品は高く評価され、奥羽第一の俳人として、北斎の錦絵の中にも乙二の句を彫ったものがある。教えを乞う者も前後数千人に及んだという。越後から奥羽各地を遍歴し、北海道には2回渡航している。奥羽俳諧四天王〔白石の乙二・秋田の五明・南部の素郷・酒田の長翠〕の一と称せられた。文政6年〔1823〕7月9日、68才で白石に歿した。白石の北郊旧福岡村陣場山に葬る。父も麦羅の号で異色ある句を詠んだ。子の十竹・きよ女〔溶々〕・竹山ともに俳諧で名を知られている。溶々は藩医で詩人の松井梅屋に嫁し、西に梁川星巖・紅蘭あり東に梅屋・溶々ありと称せられた。千手院跡には末孫齒科医亙理昭太郎氏〔明治初年岩間を亙理と改姓。亙理松窓医院を経営〕が現住している。乙二の句碑が2か所に建っている。陣場山墓地の「鶴などはとしよるものをはるの山」〔大正15〕、城址益岡公園の「粟まくや忘れすの山西にして」〔昭和33〕がそれである。乙二俳句の東北性を「美の伝統」（岡崎義恵）に『乙二をよむ時、〔芭蕉〕奥の細道は未だ真に東北の土の匂ひを掬〔く〕み取っては居ないようにさへ思はれる。芭蕉の含むあの鋭さは東北のものではない。乙二の如く鈍くして淋しいものが此風土である。日ざしのかすかな、いつも薄曇ったやうな東北の空の静かさは、乙二の句にこそ映じてゐる。』と記してある。

注(2) おおばおぶち。山城と称し、澹斎また瓢瓠庵と号す。仙台大崎八幡宮の祠官。博学で俳句にもすぐれ、遠藤日人と並び称せられた。領内各地を歴遊し「奥州名所図会」「囊塵埃捨録」等を著した。古松庵・萍華軒等の別号がある。文政13年〔1830〕8月29日歿。龍宝寺に葬る。その子も俳人、遠藤日人の偽筆に巧みであったので大場日人と呼ばれた。

注(3) 俳人。名は友翰。伊勢射和の人で、もとは僧侶だった。仙台には前後15年滞在していた。〔寛文9年～天和3年、貞享3年～同4年〕 彼は俳諧史において高い地位を占める人ではないが、松島を全国に紹介し、仙台に俳諧を普及した功績は大きい。本荒町の山本一笑の家に寄寓して、松島を探勝し、門人を育成した。三千風の号は、かつて一日に三千句をよんだことからつけたのだという。三千風が「松島眺望集」の編集を思い立ったのは、延宝2年〔1674〕のことで、松島の略図や地名を書いて全国に配布して発句を集め、その整理に8年の歳月をかけている。発句を募り、それを編集し、出版したことは、二重に松島を紹介したことになる。今から実に3百年ほど前のことである。「松島眺望集」2巻は、天和2年〔1682〕百々勤兵衛が開板した仙台最古の出版物で、原本は稀観本である。発句

を寄せた人の中に、大阪の井原西鶴、江戸の松尾桃青〔芭蕉〕がいた。西鶴は「一目玉鉾」に、想像を多分に支えた仙台と松島を書き、芭蕉をして「おくの細道」に松島の風光を嘆賞させる機縁となった。約100年の後、乙二等の出現によって仙台地方における蕉風が全盛期を迎えるのであるが、それまで仙台では三千風の作風が比較的永い間伝えられていた。

注(4) 俳人で、松窓乙二よりも2才年下であった。横井也有〔名古屋〕などとも親交があった。俳句の傾向は、奇警で俗臭があるので評価が一定していないが、門人千余人といわれ、仙台における大宗匠として勢力があった。また、俳人で俳画に巧みだったのは、仙台ではこの人だけであった。別号が多く、竹林舎・言外道・細道庵など知られているものだけでも20を越えている。仙台藩の大番士だったので、幼時から武士的の教育を受け、鈴鹿流長刀の達人となり、漢学の素養もまた深かった。寛政8年〔1796〕6月7日、広東省の中国船が本吉郡の大室浜に漂着したとき〔「星信珉（ほしのふたま）外交日記」に記事がある。〕藩命を受けてその応接の任に当たった。日人は同船の船体・器具等を描写し、それに記文を書き添えた。船主陳世徳がその漢文を読んで激賞した。如何に日人の漢学の造詣が深かったかを証明するものである。天保7年〔1836〕4月20日歿、79才。ちなみに、天保・弘化の頃、日人の偽筆に巧みだったので、世に日人と呼ばれたものに、大場日人・城戸日人の兩名がある。

注(5) ばくら。白石千手院第9代の修験。名は清馨。権大僧都法印。隣々舎と称す。松窓乙二の父。天明7年〔1789〕7月19日歿。後17年、門人停月庵鬼子〔片倉小十郎〕遺稿を集めて「麦羅念仏」とした。

資料 仙台市民図書館郷土資料目録

## 7. 仙台叢書について

問 仙台叢書は、仙台市役所が発行したものであると友人から聞きましたが、どうすれば入手できるのでしょうか。

答 「仙台叢書」は、市役所が発行したものでなくて、民間の仙台叢書刊行会が、大正11年11月から昭和13年2月にかけて刊行したものです。<sup>(1)</sup>

この叢書は、仙台に関するあまたの古書のうちから、特に資料性が高く、しかも未刊で流布少ないものを、厳選して集成したものです。この叢書の完本は、本編12冊・別刊6冊・別集4冊・「芳野花樹懐紙」1帖・続刊7冊合計30冊です。この叢書の公刊は、仙台の郷土史研究を一大躍進させる